

巨乳の淫魔に誘拐されて一日中ザーメンを搾り取られる話

虹色揚羽@3Dスケベ動画

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

豊満ボディの淫魔の濃厚なご奉仕で延々とイカされ続ける話です。

(おっぱいフェチ向け)

# 目次

【第1話】	1
【第2話】	7
【第3話】	12
【第4話】	18
【第5話】	23
【第6話】	27
【第7話】	32
【第8話】	36
【第9話】	41
【第10話】	47
【第11話】	53
【第12話】	59

【第13話】	64
【第14話】	70
【第15話】	76
【第16話】	82



## 【第1話】

人の気配がない薄暗い洞窟。その最奥の小部屋で、若い男が体を縛られ拘束されていた。

男は両手と両足を縄で固く縛られ、壁に磔にされている。

逃げようともがいても、全く身動きが取れなかった。

「くそっ……どうしてこんな目に……」

男は、とある村から依頼を受け、遠方からはるばる淫魔退治にやってきたのだ。しかし淫魔に破れて生け捕りにされ、ここへ連れて来られたのだ。

「おまたせ。お兄さん、いい子にしてた？」

妖艶な声と共に、淫魔が現れた。

篝火に照らされたその姿は、ぞつとするほど美しい。

長い白銀の髪。褐色の肌。細身のすらつとした体躯。引き締まった細い体ではあるが、軽くJカップはあろうかという巨乳。尻やふとももムッチリと肉付きがよく、見ているだけで情欲が湧き上がってくる。

淫魔はその豊満な体に、黒を基調としたドレスをまとうている。露出度が高く、褐色

の肌を惜しげもなくのぞかせている。ふともも、谷間、そして程よく割れたしなやかな腹筋が美しい。

(改めて近くで見ると……なんてすごい体なんだ)

男の妄想を具現化したような、この世のものとは思えないほどのナイスボディ。それでいて、顔は可憐な少女のよう。

淫魔が一步足を進める度に、Jカップの爆乳がぶるぶる揺れる。

「私は淫魔のエマ。よろしくね。さっきからいい匂いするでしょ？ あなたのために、性欲を高めるお香を焚いてるの」

男の耳元で、淫魔が囁く。

(なるほど……さっきから股間がムズムズするのはそのせいかな)

「どう？ 性欲、高まってきたでしょ？」

淫魔の可憐な顔が、男の目の前に迫る。熱い吐息が吹きかかり、男は思わず身をよじらせた。

「んふふっ……何恥ずかしがってるの？ まだ何もしてないのにこんなに勃起させちゃって……」

淫魔は男の股間を見ながら、クスクス笑う。

「私たち淫魔のエネルギー源は、オスの精液なの。もちろん知ってるよね？ 知ってて

私に戦いを挑んできたんでしょ？ 魔法を使える淫魔に、人間なんかが勝てるわけないのね……ねえ、本当は淫魔にエッチなことされるの期待してたんじゃないの？」

「違う……そんなことは」

「ふくん、じゃあなんでこんなに勃起してるのかな〜？」

淫魔は魅惑的な上目遣いで見上げてくる。温かな吐息が首筋に吹きかかり、甘い花のような香りがふわりと漂う。

聞くところによると、淫魔は気に入った男を見つけると、繰り返しザーメンを搾り取るらしい。カラカラに干からびて死ぬまで。

男は下着の中でペニスをギンギンに勃起させながらも、命乞いする。

「お、お願いします……命だけは……」

「なくにビビツちゃってるのかな？ 私を殺そうとしたくせに、情けないなあ」

「……………っ！」

「まあ、生かすか殺すかは、あなたの態度次第かな？ ちゃんとして私の言うことを聞いて、いい子にしてたら……考えてあげなくもないけど」

「な、何でもしますから、許してください」

「ふふっ……チンポ勃起させながら、女の子相手に涙目で命乞いするなんて……とんだ変態ね。恥ずかしくないの？」

淫魔は威圧的なまなざしを向ける。

男はすでに、淫魔の魅力に骨抜きにされつつあった。下着の中では肉棒がいきり立ち、カウパーが次々と溢れる。甘酸っぱい欲望が込み上げてきて、息が荒くなる。

「ねえ……ズボン越しでも分かるぐらい、勃起チンポがビクビク動いてるよ？ しかもハアハア言ってるし……んふふっ……エッチなお兄さんね。正直ちよつと気持ち悪いんだけど」

そう言いつつも淫魔は体をすり寄せてきた。男の腕に、やわらかい胸が密着する。布越しでも十分に伝わってくる、ふわふわで柔らかな感触。

お香の効果もあつてか、肉棒の高度がさらに増していく。下半身全体がまるで別の生き物のように熱い。

「つらいよねえ。射精できなくてもどかしいよねえ……もう我慢できないでしょ？」

淫魔は男の首筋をそつと指でなぞる。男は小さくうなずいた。

「じゃあ、私の目を見て、いやらしくおねだりできたら、イカせてあげる」

「……っ！」

男はしばらくうつむいて戸惑っていた。淫魔を退治しに来たというのに、よりにもよつて淫魔の手に落ちるなどもつてのほかだ。

だが男はすでに淫魔の美しさに魅了され、すっかり魅入られていた。もはや肉欲に抗

うことはできなかった。

男はやがて意を決し、勃起した肉棒をヒクつかせながら、

「……………イカせてください」

小声でつぶやく。

「え？ よく聞こえないから、もっと大きな声で言つてよ」

「……………お願いします、イカせてください」

「うわあ、本当に言つちやつた。お兄さんやつぱり変態じゃない…………でも、それじゃまだダメ。全然愛情が伝わらないよ」

淫魔は、鼻息が当たる距離まで顔を近づけてきた。

「ねえ、お兄さん。どうしたの？ さつきからずっと顔が赤いよ？ それに私の顔を、熱っぽい眼で見つめちやつてさあ……………特におっぱいを見る時の目つき、すつごくいやらしいよ」

淫魔は男の頬に両手を添え、互いの吐息がぶつかるのも構わず、間近で視線を合わせる。

「私の目を見て、ちゃんと本当のことを言つて。私をどう思ってるかとか、私の体をどうしたい、とか。思つてること、正直に全部言つちやいなさい。ちゃんと言えたら、スゴイ気持ちいいことしてあげる」

淫魔は男の衣服をはぎ取った。鍛え抜かれた肉体と、いきり立った立派な肉棒が露になる。

「へえ、結構いいカラダしてるじゃない。私、フェラ得意なんだあ……♪ チンポしゃぶるの大好き。あと、パイズリも好きだよ。男の人は大体パイズリ大好きだもんねえ。硬いチンポをおっぱいの谷間でしごいてたら、私も興奮して濡れてきちやうの。あと、もちろんココも好きだよ」

淫魔は自らの股に指を這わせる。

「淫魔のココは、人間のそれとは比べ物にならないほど気持ちいいんだよ♪」

淫魔は熱のこもった視線で男を見つめると、ガバツと抱き着き、男の顔に胸を押し付けた。

「おっぱい柔らかいでしょ〜?」

黒いドレス越しに伝わる柔らかな感触。顔を包み込む多幸福感。全身を駆け巡る情欲が、硬くなった肉棒から我慢汁をほとばしらせる。

理性が弾け飛び、淫魔の言いなりになるまでそう時間はかからなかった。

## 【第2話】

「えらいね〜お兄さん。ちゃんとおねだりできたね〜♪」

淫魔は男を抱きしめ、むにゆうう……と胸に顔を埋もれさせる。

「自分の快樂のために、人としてのプライドを投げ捨てちゃつてえ……本当にエツチなんだから♪」

淫魔は黒いドレスをはだけさせ、肩を露出した。そうして胸を寄せ、深い谷間を強調する。豊かな双丘が、ふにやりと形を変える。

「ほらほら〜、お兄さんの大好きなおっぱいだよ。Jカップあるんだよ。大きいでしょ？ 人間の女の子だと、ここまで大きい子つてなかなかないもんね。ねえ、生のおっぱい見たい？」

淫魔は胸を寄せて揺さぶり、ニヤリと微笑む。そしてたつぷり焦らしてから、ドレスを全て脱ぎ捨てた。

ぶるんぶるんつ、と派手に揺れながら、大きな胸がこぼれ出る。

淫魔のその豊満な体を隠すのは、黒いパンティーのみ。

巨乳というより、爆乳という表現のほうがしっくりくる。圧倒的な大きさの乳房。そ

れでいて不思議と形は整っており、ぷるんと張りがある。乳首はビンビンに勃起していて、乳輪はやや大きめ。

褐色の爆乳。しなやかに割れた腹筋。肉付きの良いふとももとお尻。

淫魔の半裸姿を見ているだけで、男の肉棒はさらに高ぶっていく。

「あははっ……チンポすごいことになってるね。我慢汁でビチョビチョだし、テカテカ光ってて、とつてもいやらしいよ。それにまだ射精してないのに、精子のにおいするんだだけ……」

淫魔は肉棒に鼻を近づけ、すんすん匂いを嗅ぐ。吐息が当たると、それだけで肉棒が反応した。淫魔は面白がって何度も息を吹きかける。

「ふうーっ……ふうーっ……あははっ、可愛い♪ 敏感なおちんちんさんだね。今にも爆発しそう……もう触らなくても精子出ちゃうんじゃない？」

淫魔は体をすり寄せ、生のおっぱいを男の胸板に押し付ける。やはり生の乳房は格別だ。とろけるような柔らかな感触の中に、乳首のコリコリとした感触がアクセントとなり、男は思わず吐息を漏らす。

「また一段とチンポが元気になってるよ？ 本当におっぱい大好きなんだね〜」

淫魔は胸を男の脇腹に擦りつけながら、ペロツと舌を出す。そして男の乳首をちゅぱちゅぱ舐めた。そして両手で男の体を優しくマッサージするように撫でまわす。

「分かるよ。チンポがムズムズするでしょ？ イキたくてイキたくてしょうがないでしょ？ でももうちよつとだけ我慢しようね。チンポ勃起させたまま、たくさん我慢して、我慢汁をたつくさん出して……キンタマの中に溜まった精子をじっくり熟成させて……それからピューツ、ピューツって射精したら、腰が抜けちゃうくらい気持ちよく射精できるんだよ」

「別に意地悪してるわけじゃないの。こうやってじっくり焦らしたほうが、精子いっぱい出るし、お兄さんにとつても最高の射精になると思うよ？ ……そう言われるとまた興奮してきちゃった？ んふふつ……じゃあ頑張ってもう少しだけ我慢しようねえ」

淫魔は生の褐色おっぱいを男の顔に押し付け、激しく揺さぶり、柔らかい肉の感触を堪能させ、さらに興奮を高めていく。

「お兄さん、おっぱい大好きなんだよね。だつてさつきからずつと私のおっぱいばかり見てるじゃん。……そんなに好きなら、おっぱい吸つてもいいよ」

淫魔は胸を突き出し、乳首を男の口元に持つていった。

「ほらあ……乳首ピンピンに立つてるの分かる？ 恥ずかしがらなくていいよ。赤ちゃんみたいにちゅうちゅう吸つて♪」

淫魔はまるで赤ん坊を抱きしめるかのように、男の首へ両腕を回す。

男は乳首を啜え込み、硬くなった乳首にむしゃぶりつく。そしてその素晴らしいおつ

ばいの感触を、唇で、舌で、顔で味わう。

興奮のあまり肉棒が最高潮に硬くなり、もはや痛いくらいだ。腰がビクビク震え、滝のように我慢汁が溢れ出す。

「おー、おー、チンポすっごいあらぶってる……いい感じだね。もうちよつとの辛抱だよ。あとちよつとだけ我慢できたら……射精させてあげる」

淫魔は自分の胸を掴み、もにゅんと一度強く揉んだ。すると乳首から暖かい液体が溢れ、男の口に広がる。

甘くて生ぬるいその液体は——母乳。甘美な味わいで、香りもよく、魅惑的なほどに美味しい。男は夢中で母乳を飲み込んだ。

「人間の母乳は薄くてまずいらしいけど、淫魔のはとつてもおいしいの。これを味わったら、もう人間の女の子じゃ満足できなくなっちゃうかもね」

淫魔は自分の胸を揉み、大量の母乳を男の口へと流し込みながら、そつと頭をなでる。「それに淫魔の母乳には、強力な媚薬効果があるの。何度も射精して萎えちやつたチンポでも、母乳をちよつと飲んだだけでまたギンギンになるんだよ。すごいでしょ？ 何度でも極上の射精が味わえるんだよ？」

淫魔は、ビクビクと跳ねまわるチンポを見て、嬉しげに微笑んだ。

一方、男はもう正気を失う寸前だった。

(体が熱い……もうだめだ、このままじゃおかしくなりそうだ……)

男は快樂に耐え、目を閉じてなんとか正気を保とうとする。

「んふふっ……このままじゃ本当に壊れちゃうかもね。……仕方ないなあ……じゃあそろそろイカせてあげる♪」

## 【第3話】

男は長い間焦らされ、体中が敏感になっていた。特に肉棒の誇張は凄まじく、みずから分泌した我慢汁でぬるぬる光沢を帯びている。

太い血管が浮き出てガチガチに勃起したグロテスクな肉棒へ、淫魔が顔を近づける。淫魔は男の目を見つめたまま、亀頭にキスをした。

「……っあー！」

たったそれだけの刺激で、男は腰をひくつかせた。柔らかな唇がたった一瞬亀頭に触れただけで、肉棒と腰が敏感に反応する。

「あははっ、いい反応だね。これからもーっと気持ちいいことしてあげるからね〜」

そう言うと、淫魔は再び亀頭にキスし、そのまま唇を竿に這わせる。やわらかい唇でペニスに触れられ、その甘美な快感に男は身悶えする。

唇に何度もキスされ、まるで射精するかのように我慢汁が溢れ出す。

「先っぽからエッチなお汁がたくさん出てるよ。おいしそう♪」

淫魔は舌なめずりを一つすると、色っぽい表情で口を開け、男のペニスにむしゃぶりついた。

「じゅぽっ……じゅぽっ……んっ……んぶっ……じゅぶぶ」

淫らな水音と、男の吐息が洞窟内の小部屋に響く。

淫魔は柔らかな唇で肉棒を包み込み、熱いヌルヌルの唾を絡めながら、強く吸い付いてくる。絶妙な舌遣いで敏感なところを舐めてくる。

「じゅぽっ……お兄さんの我慢汁、おいひいよ……オス臭くて、苦くて、とつてもエツちな味。もつと飲みたいな……ねえ、もつと我慢汁出して♪ じゅぶぶ……じゅぽっ……ほら、もつとチンポ硬くして、我慢汁いっぱい出して。そしたらたつぷりサービスしてあげる」

淫魔は魅惑的な上目遣いで男を見上げながら、いやらしく肉棒にしゃぶりつく。

絶世の巨乳美少女が、汚い肉棒を口に啜えている。それだけでもう射精してしまうくらい興奮する光景だ。

淫魔は、敏感な亀頭や裏筋を的確に舌でちろちろ刺激してくる。少しでも気を抜けば、すぐに射精感が込み上げてくる。

「はあ……はあ………気持ちいいです」

男は荒い息をしながら呟く。油断すれば精子が込み上げてそうになるが、極上のフェラを少しでも長い間味わっていたくて、なんとか射精感をこらえる。

長時間にわたって焦らされたこともあり、男の体——特にペニスはかなり敏感になっ

ている。そこを口で重点的に愛撫されては、ひとたまりもない。

肉棒はかつてないほどに硬く勃起し、我慢汁がどばどば流れ出る。

「あんっ♪ 我慢汁すごいよ。そんなに気持ちいいの？ 口の中ヌルヌルになっちゃうよ〜」

淫魔は嬉しそうな声を上げると、また肉棒に吸い付く。我慢汁と睡でヌルヌルの熱い口腔が、敏感な肉棒を包み込み、ジュポジュポと音を立ててしごき上げる。ぷっくりした柔らかな舌が龟头を舐めまわし、裏筋をチロチロ舐め上げる。

「さっきからチンポと体がすっこくビクビクしてるけど、私のフェラそんなに気持ちいいの？」

龟头をちゅうちゅう吸いつつ、淫魔が尋ねる。

「はあ……はあ……すごい気持ちいいです……ああ……もうイツちやいそうです」

「んふふっ……いい表情してるね。これでも加減してるほうなんだけど……いいよ。我慢しなくていいから、イキたくなったらいつでも、思いつきり射精しなさい。……じゅるるっ、じゅぶぶっ、じゅぼっ……ちゅっぶ、ちゅっぶ、じゅぼっ」

「ああっ、そんなに早くされると、もう出ちやいます」

「じゅるる……じゅぼんっ……ねえ、お兄さん。さっきからずっと射精我慢してるでしょ？ 本当は、イカせようと思えばいつでもイカせられるんだけど。お兄さんがまだ

イキたくないみたいだから、仕方なく加減してあげてるのよ?」

淫魔はペニスから口を離し、男の耳元で囁く。

「さつきも言ったでしょ? 淫魔の母乳には強力な媚薬効果があるの。たとえイツたあとにチンポが萎えたとしても……私の母乳を飲んだ途端に、すぐにまたギンギンに立ちやうんだよ? 何回でも射精できるのに、我慢しなくていいじゃん。……じゅぷつ、じゅるるつ、じゅぽつ……ほらあ、チンポの奥からザーメンが込み上げて来てるの、伝わってくるよ」

そう言いながら、淫魔は入念に肉棒を舐め上げる。

「つらいでしょ? せりあがってくるザーメンを抑えるのも、もう限界でしょ? なら出しちゃおうよ♪ 気持ちよく精子出して、スッキリしちゃうよ」

淫魔はひとときわ強く、肉棒をしやぶる。頬がへこむほど吸い付き、激しいフェラを繰り返す。イカせることだけが目的の豪快な愛撫だ。

まるで心の中を見透かされているようだ。男は射精をこらえるのを諦め、淫魔に体を委ねる。

あとはもう一瞬だった。

すさまじい快楽と共に、体の奥から精液が込み上げてくる。長い間焦らされ、熟成された精液が込み上げてくる。

「お兄さんは、チンポだけに意識を集中させて、いっぱい気持ちよくなって。いっぱい感じて、一生懸命、精子作りなさい」

淫魔の声に対して、男は快楽のあまり、うなずくだけで精いっぱいだった。

ペニスへの愛撫で最も快楽が高まるのは、射精している瞬間だ。その瞬間が近づいている。

——ドピユツ、ドピユルル、ドプツ、ドピユルル、ドクツ、ドクツ、ドピユツ！

肉棒が爆発するかのように震え、淫魔の口内に大量の精液が放たれる。あまりにも高ぶりすぎて、淫魔の口から肉棒が、ブルンツ、と飛び出してしまった。

淫魔はすぐに手でペニスを握り、優しくしごき上げる。

「手でしてあげるから、いっぱい出して♪」

精液を絞り出すのに最適な手の動かし方だ。もちろん、最高に気持ちいいことは言うまでもない。

——ビュルルツ、ビュプツ、ドピユルルツ、ドピユツ、ドプツ！

爽快な射精感を味わいながら、男は二十秒間ほど精子をまき散らし続けた。

「ひゃあ、すごーおい……まさかこんなに出るなんて♪」

淫魔は嬉しそうに舌なめずりをする。淫魔の美しい肢体が、黄ばんだドロドロのザーメンでべとべとに汚れている。

まるで、十人くらいの男たちにザーメンをぶっかけられたかのような有様だった。顔や髪、褐色の乳房、美しい腹筋、綺麗なお尻……淫魔の全身に、白いドロドロの液体がへばりついている。

「ああん、いいよ……あなたのザーメン。こうして大量にぶっかけられると、体が熱くなって、魔力と生命力が溢れてくるの……ねえ、気持ちよかったでしょ？ 他にも色んな気持ちいいことしてあげるから、もーつと精子ちょうだい♪」

ザーメンまみれの絶世の巨乳美人が、精液を要求する姿。男はそれを見て、肉棒をビクンと震わせる。肉棒がまた硬さを取り戻しつつあった。

## 【第4話】

「ん〜……じゃあ次はどうやってイカせてあげようかな」

淫魔は思案しつつ、礫にされた男の乳首を指先で弄る。先ほどまでの責めで全身が敏感になっている男は、繊細な反応を示した。

「ふふっ……男の子なのに乳首感じるんだ。こんなのでチンポひくひくさせちゃって……可愛い♪」

淫魔は男の乳首を刺激りながら、柔らかなおっぱいをすり寄せる。男の胸板に、柔肉がむにゆううう……と食い込む。

「うわあ……おっぱい当てられただけでカウパー垂らしちゃってる……お兄さんやっぱ変態じゃん」

もにゆっ、もにゆっ、と柔らかいおっぱいを押し付ける淫魔。そのあまりの感触のよさに男は恍惚としていた。おっぱいを当てられた箇所が、溶けていくかのような感覚。

「どう？ おっぱい気持ちいでしょ？ 人間の女の子のおっぱいより、ムチムチで弾力があるし、こうして押し付けられてるだけでもたまらないでしょ？ ねえ、想像してごらん。このふわふわのおっぱいでチンポ挟まれたら……ものすごく気持ちよく射精

できると思わない？」

淫魔の言葉に、男の肉棒はさらに高ぶる。極上のおっぱいの感触を早くペニスで味わいたくて、勃起した強直がいつそうギンギンに硬くなる。

「元氣なオチンチンだね。あんなにいつぱい射精したのに、さつきより硬そうなんだけど……」

淫魔は舌なめずりをすると、おっぱいを押し付けつつ、体をくねらせて揺さぶる。柔らかな肉がぶるんぶるんと豪快にたわみ、愛撫する。

男の胸板へ、むにむに……むにむに……とおっぱい何度も繰り返し擦りつける。さらには男の脇腹や、ふとももへ入念に胸を押し当てる。脈打つ肉棒は一切刺激せず、股間以外の全身をおっぱいで丁寧にマッサージし、体中の凝りを揉みほぐしていく。

男は全身の疲れが抜けていき、性感が高まるのを感じた。

「おっぱい大好きな人は、こうしてあげると、興奮してカウパーまみれになっちゃうんだよね」

そう言うと、淫魔はチラリと下を見て肉棒の様子を確認する。

「あははっ、やっぱりカウパーまみれになってる♪ すごいじゃんこれ、ローション塗りたくったみたいになってるんだけど……自分の出したカウパーでこんなになっちゃうなんて、お兄さん、だいぶ変態じゃない？」

淫魔は、男の胸板におっぱいを押し付けたまま、玉袋をそつとわしづかみにする。

「はあつ……」

腰を跳ねさせ、情けない声を漏らす男の姿を見て、淫魔は楽しそうにクスクス笑う。「ねえねえ、見て？ 玉袋もパンパンに張つててすごいエッチだよ。この中に臭いザーメンがいつぱい溜まつてるんだよね。……じゃあ今から、キンタマの中に溜まつたザーメン、全部出しちやおつか♪」

淫魔は肉棒の根元を軽く手で押さえ、おっぱいを揺さぶりながら擦りつけてきた。硬くなった肉棒が、柔らかな乳肉をかきわけていく。我慢汁にまみれた肉棒は滑りがよく、より快感を高める潤滑油となる。

「ちよつとお……お兄さんのカウパーでおっぱいヌルヌルになっちゃったんだけど……エッチなオスの臭いが染みついちやったらどうしてくれるの？ てゆるか、いくらなんでも我慢汁出しすぎだよ？ 言つとくけど普通はここまで出ないからね。……つてまたカウパー出てるし……本当にエッチなんだからあ♪」

淫魔は、おっぱい全体にカウパーを塗り広げるようにして、肉棒をおっぱいに擦りつけていく。

男は快楽に腰を振るわせる。体の中で最も敏感な部分——肉棒で味わう、ムチムチの極上おっぱいの感触。あまりの気持ちよさにカウパーがとめどなく溢れ、さらに滑って

快樂の度合いが高まっていく。時折当たる乳首のコリコリした感触がたまらない。

「じゃあそろそろ挟んであげる。お待ちかねのパイズリだよ。おっぱい大好きな男の子って、大体パイズリ好きだもんね。どうせお兄さんも好きなんでしょ、パイズリ♪

……あははっ、やっぱりね。じゃあタップリ挟んであげるから、覚悟しなさい♪」

淫魔は胸を寄せて深い谷間を作る。そこへ、タラーツ、と唾液を垂らした。

何ともいやらしい光景に、ビクンと肉棒が跳ねる。

「ほら、いくよ〜♪」

淫魔はもう一度軽く胸を寄せ、おっぱいでペニスを飲み込んだ。

「チンポ硬いっ……すっごいビクビクしてる。あっ……まだ硬くなってる……。すっごい……挟まれただけでこんなに反応するなんて……んふふっ、パイズリしがいがあるね」

淫魔は微笑むと、体を上下させ、ゆっくりとおっぱいでペニスをしごきはじめた。

「……………」

男は小さく喘ぎ声を漏らす。淫魔のパイズリの感触は……まさに至高。柔らかな乳肉にみっちり挟まれた肉棒が、とろけていくような快感。

豊かな胸の谷間から、ひよっこりと亀頭が現れる。

「おーおー、気持ちよさそうな顔してるね。このままパイズリで2回くらい続けてイカ

せてあげるね♪」

淫魔は色っぽい表情で男の顔を見上げながら、パイズリによる奉仕を続けるのだった。

## 【第5話】

篝火に照らされた薄暗い洞窟内では、肉が弾む淫らな音と、快楽に震える男の吐息だけが響く。

「どう？　パイズリ気持ちいい？　まあ聞かなくても分かるくらいビンビンになってるけどね。フェラの時よりもガチガチにしちやっつてえ♪　男の子って本当にコレ好きだよね」

淫魔は、豊満で柔らかなおっぱいで肉棒を丸ごと包み込み、ゆつくりとしごき上げる。大量に溢れ出たカウパーがローションがわりとなり、にゆるんにゆるんと乳肉がよく滑る。

「あつ……す……い……柔らかいおっぱいにチンポが包まれてる……」

男は感じながら小さくつぶやく。

乳圧がすさまじい。締め付けが強く、しつかりと肉棒をホールドされている。

パイズリという見た目だけというイメージがあるが、淫魔のそれは別物だった。はつきりと輪郭のある刺激を感じられる。それでいて、おっぱいの柔らかさも伝わってくる。

「ふふっ……気持ちよさそうだね。とろけちゃいそうな顔してるよ。淫魔のパイズリ、病みつきになっちゃうんじゃない？ これを味わったらもう人間の女の子のパイズリじゃイケないかもね。……じゃあ極上のパイズリ、もーっと味わってね♪ チンポもーっとガチガチに勃起させて、目いっぱい気持ちよくなってるね。ゆっくりシゴいてじっくり味わわせてあげるから、ネットリしたザーメン、いっぱい出してね♪」

淫魔はザーメンを絞り取るように、寄せたおっぱいを巧みに操って肉棒を擦る。

破裂しそうなほど高まった肉棒は、触れると火傷してしまいそうなほどに熱い。その肉棒が繰り返して擦られ、摩擦でいつそう熱を帯びていく。

ヌルヌルと往復しながら密着する谷間とペニス。谷間が徐々に蒸れ、湿り気を帯びて汗ばんでいく。そこへカウパーが溢れ、交じり合ってヌルヌルに滑り、いやらしい水音を響かせる。

「あんっ……またカウパー出してる……お兄さん、エッチしてる間ずっとカウパー垂れ流してるじゃん。ほら見て？ ローション使ってないのに、ローションパイズリみたいになってるよ？ ネットの透明なカウパーが谷間に溢れちゃってる……」

淫魔は顔を上げ、こう続ける。

「気持ちいいよね♪ 自分のカウパーでヌルヌルになったおっぱいでパイズリされるの♪ ズるたびにカウパーお漏らして、どんどんヌルヌルになって気持ちよくなっちゃう

でしょ？ あははっ、おっぱいでシゴくたびにヌチュヌチュいつてる。こんなのされたら、うぶなお兄さんは我慢できなくなっちゃうよねえ……」

美しい美少女……それもJカップの綺麗なおっぱいを持つ淫魔が、ひざまずいて谷間に肉棒を挟み、パイズリをする姿。それだけで男はもう興奮を抑えきれなくなる。

血管が浮き出た太い肉棒が、おっぱいの谷間から出たり入ったりする様子は、とても煽情的だ。男は息を荒げて小さく喘ぐ。

「はあ……はあっ……気持ちいです」

すでに男は、淫魔から与えられる快樂のことで頭がいつぱいになっている。他のことを考える余裕は到底なかった。

この洞窟から脱出することなど、もはや忘却の彼方だ。

肉棒を高ぶらせ、至高のパイズリを味わうことが、男の今の望みだった。

「そろそろキツイでしょ？ パイズリ挟射で一発出しちゃおっか」

墮落しきった男の心を見透かすように、淫魔はおっぱいを素早く上下させ、ペースを速める。

すると当然、加速度的に快感が強くなる。胸での愛撫の快感のレベルが一気に強まって、あまりの心地よさに男は腰をひくつかせる。

「また射精するの我慢してるの？ 私が本気出せば一瞬なんだけどなあ……っ」

淫魔は舌をぺろりと出しながら、むにゅううう……とおっぱいをみっちり寄せ上げる。

乳圧が強まり、ペニスが柔肉にみちみちと締め付けられた。その状態で擦られると、天にも昇るような快楽が込み上げてくる。

「あつ、あつ……イッちゃいます……」

男は情けない声を上げながら、淫魔のほうを向く。

「いいよつ、来て。私の目を見ながら思いっきり射精しなさい。キンタマに溜まったザーメン、ゼーンぶ出してスツキリしちやいなさい。いっばい精子ぶっかけて♪」

淫魔が激しくおっぱいを揺さぶると、

——ドピユツ、ドピユルルツ、ドプツ、ドプツ、ドピユツ、ドプルルツ！

うどんのような精液が次から次へと噴き出した。

「ああつ、熱くて濃いのがいっばいかかっている……」

すでに淫魔の顔とおっぱいはザーメンまみれになっているが、なおも射精は続く。

——ドピユルルル、ピユルルツ、ピユプツ、ピユルツ、ドピユツ！

「すつこい飛んでる♪ ドロドロであったかくておいしそう……もつと出しているよ」

淫魔は、みずからの体を汚していく精液を、恍惚とした表情で受け止める。

精液が飛び出す中、淫魔は優しくパイズリをして、最後の一滴まで絞り出した。

## 【第6話】

「ほらあ……見て。お兄さんのザーメンで、おっぱいも顔もベトベトになっちゃったよ♪」

淫魔は頬にへばりついた精液を手ですくい、舌で舐め取る。

「熱くてトロトロしてて、とつても濃厚でおいしい……お兄さんのザーメン舐めると、体の底から生命力がみなぎってきて……おまたがキyunキyunしちゃうの。ねえ、お兄さんが射精するところ見てたら、私もちよつと濡れてきちゃった♪」

淫魔は、イッた余韻で震える肉棒を、再びおっぱいの谷間に挟み込んだ。軽めの乳圧でみっちり包み、圧をかけていく。

「もうガツチガチじゃない♪ また母乳飲まなくても、全然イケそうじゃん。……じゃあ、次はこのザーメンまみれのおっぱいでパイズリしてあげるね」

淫魔は精子まみれの谷間で肉棒をにゆるりと捉え、適度な乳圧をかけつつ、上下に擦り始める。生暖かい精液が谷間に塗り広げられ、かき混ぜられ、グチュグチュと卑猥な音が響く。

香り立つザーメンの臭い。おっぱいの谷間で泡立つ精液。男は興奮し、さらに肉棒を

高ぶらせる。

「さつきよりちよつと硬い気がするんだけど……こういうの好きなの？ ザーメンまみれのおっぱいでパイズリされるの好き？ ……チンポの反応だけで分かるよ。こうしておっぱいで挟んでると、どんなことをされたら興奮するのかすぐ分かるんだから。お兄さんのチンポ正直すぎだよ。さつきより硬いし、反応いいし……はあ……ザーメンまみれのおっぱいでシゴかれて興奮するなんて……やっぱり変態だね、お兄さん♪」

パイズリをしばらく続けていると、ザーメンが泡立って白くなり、時間が経つにつれて視覚的にいやらしい光景となっていく。

白濁した谷間とチンポが擦れ、ヌチュヌチュと音を上げる。そこへカウパーが次々と垂れ落ちた。

「ああん……またカウパー溢れてきた……ほんと元気なチンポだね♪ まだまだイケそうじゃん。よかったねお兄さん。もつともつと気持ちいいこと楽しめるよ。キンタマが空になるまでザーメン搾り取ってあげるから、一生懸命感じて、いっぱい射精しなさい♪ そうそう……はあはあ感じて、ザーメンたっぷり作りなさい」

特濃の白い精液が泡立ち、ペニスやおっぱいに張り付く。

ヌルヌルした柔肉が一度往復するたびに、快感が腰を抜けていく。

「イキたくなったらいつでもイッていいからね。我慢なんてしなくていいから、思いつ

きりドピュドピュツ、つてザーメンぶちまけなさい♪」

もう射精を我慢しても無駄なことは、男も理解していた。

どこなのかもわからない洞窟の奥で、ひたすら肉の快楽を貪り、身も心も全て目の前の淫魔に委ねる。

「ああ……気持ちいい……天国だ……」

男がつぶやく。

「本当？ それはよかったねえ」

「もう……気持ちよすぎておかしくなりそうです」

「いいよ、おかしくなつて♪ ここには私たち二人の他には誰もいないんだよ。ここなら好きなだけエッチできるよ。大きな声を出してもいいし……いっぱい感じていいんだよ♪ そろそろ素直になろうよ、お兄さん。もうチンポ気持ちよくなることしか考えられないでしょ？」

淫魔はおっぱいをこねくり回し、左右交互に乳房を滑らせ、肉棒を刺激してくる。

まるで肉棒全体をおっぱいで揉みほぐされるような感触だ。男は肉棒を打ち震わせ、快楽に浸る。

「今だつてそうでしょ？ パイズリで気持ちよくなることしか考えてないでしょ？ 気持ちよさそうな顔しちやつてえ♪ すっごい幸せそう♪ ねえ、どうなのお兄さん。私

のパイズリ気持ちいい？ 今幸せ？」

「はあ……はあ……気持ちいい……すごく幸せです」

「んふふっ……私も栄養満点のザーメンいっぱい飲んで幸せだよ。じゃあさ、そろそろ精子出して、もっと幸せになっちゃおうか♪」

淫魔はおっぱいを左右交互に大きく揺さぶり、柔らかな乳房で肉棒を押しつぶすかのように激しく愛撫する。

——又チュツ、又チュツ、グチュツ、ブチュツ、又ポツ

ザーメンとカウパーにまみれた谷間から、液体音が絶えず鳴る。洞窟内に、又チュヌチュとリズムミカルな猥音が響く。

肉棒が谷間から飛び出しそうなほど震え、男は腰をカクカク震わせる。

「はーい♪ おっぱいの中で、幸せ汁いっぱい出そうね♪」

——ドピュツ、ドビュルルツ、ビュルルツ、ピュルツ、ピュツプ、ピュプツ！

またも、うどんのように太くて濃い精液の塊が、次から次へと溢れ出す。

——ドビュルルツ、ビュツ、ビュツ、ドピュツ、ピュツ

男の肉棒から、止まることなく精液がほとばしる。

固体のような汚液がおっぱい全体にへばりつき、さらに淫魔の美しい顔へと容赦なく飛び散る。

「きゃあっ♪」

肉棒は谷間の中でまだ脈動を続けている

射精は二十秒以上続き、男は爽快な射精感を存分に味わい、大量の精液を吐き出した。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

射精を終え、男は荒い息を繰り返す。最高に気持ちよかったが、これだけ射精時間が長いと、意識が飛びそうになる。

「いっぱい出して気持ちよかったですよ？ あはっ、また立ってる♪ まだまだこれじゃあ終わらないよ？ もっと気持ちいいことしようよ♪ ……あっ、その前に……ザーメン吸収して、1回綺麗にするね」

淫魔の全身が淡く発光し始めた。次の瞬間、淫魔の全身についた精液が消え去っていった。あれだけベトベトに汚れていた体は、一瞬にして綺麗になった。魔法でザーメンを吸収したのだろう。

「ごちそうさま♪ 綺麗になったから、またぶっかけられるよ。……どうせお兄さん、精子ぶっかけるの好きなんですよ？ ……あゝ、やっぱりそうなんだ。……んふふっ、またチンポ硬くなってるじゃん。私のおっぱいにザーメンぶっかけるところ想像して、興奮しちゃった？」

## 【第7話】

「チンポ半立ちだね……さすがにフル勃起は無理かあ……まあ、続けて何回もイッチャつたししようがないよね」

淫魔は精液まみれの肉棒にしゃぶりつき、

——ジユルルツ、ジユポツ、グポツ、ジユポツ！

音を立てて吸いながら、精液を舐めとつていく。肉棒全体を舐めまわし、精液を舌で舐めとつて残さず飲み干した。

「こくつ……ねえお兄さん、このチンポどうして欲しい？ またヌキヌキして欲しい？」

「はい……」

「んふふつ、やつと正直になったね。いい子だねお兄さん」

淫魔はおっぱいを男の顔に押し付けた。ムニユムニユとした肉の感触が男の顔を覆い、窒息しそうになる。

「はい、お兄さんの大好きなおっぱいだよ♪ こうされるとまたムラムラしてきちゃうでしょ？」

そうしておっぱいに埋もれさせたまま、淫魔は手で肉棒を軽くしごき始めた。

「あつ……はあ……はあ……」

「お兄さんのチンポまた硬くなってる……熱い息がおっぱいにかかつて……あつたかくてドキドキしちゃう♪ 興奮してるのが伝わってくるよ♪」

淫魔は男の首に両腕を回してギュツと抱きしめ、ムニムニとおっぱいを押し付ける。

その気になればペニスを射精に導けるほどのすさまじい乳圧が、男の顔をモニュモニュと圧迫する。

「だんだん息が荒くなってるね……あははっ、そんなにハアハアされるとくすぐったいよ」

顔にみっちりと柔肉が吸い付いてくる。その気持ちよさに興奮し、男の肉棒は再びギンギンにそそり立つ。

ほとんど息ができなくて、だんだん息苦しくなってくる。だが男は、辛いどころか、むしろ幸せだった。この柔らかさに溺れたまま死ぬのなら本望だろう。

男が窒息する寸前になって、淫魔はおっぱいを離した。

「……あのまま埋もれてたら本当に窒息しちゃってたかもね。苦しいはずなのに、なんで逃げなかったのかな？ おっぱいから顔を離そうと思えば離せたはずだよ」

淫魔は男の胸板におっぱいを密着させつつ、ニユニユと尋ねる。男が顔を背けると、淫魔はその頬にキスをした。

「ちゅっ……お兄さんってほんとバカだね♪ バカだし、エッチだし、変態だし……私にザーメン絞られて死んでも仕方ないんじゃない？」

淫魔はクスクス笑いながら不穏なことを口にするが、男はちつとも驚かない。もうここから逃げるなど眼中になく、更なる快楽だけを待ち望んでいたのだ。

「ふーん……驚かないんだ。もう頭の中がエッチなことではいっぱいになっちゃったんだあ♪ 生きて帰る気も起きなくなっちゃったんだね。お兄さん、もう人として終わっちゃったねえ」

淫魔は男の玉袋を手で弄る。指先で玉袋を転がし、撫でまわし、優しくマッサージをする。ザーメンを作る部位を刺激され、男の性感が高まっていく。

「だってそうでしょ？ お兄さん、ちゃんと理性を保てないと、本当に死んじゃうよ？ このまま快楽に溺れて射精し続けてたら、いずれ体中カラカラになって死んじゃうんだよ？ それなのに、こんなに我慢汁出しちゃってえ……チンポもガツガチだし……これってもつと私とエッチしたいってことでしょ？」

淫魔が玉袋を揉むと、カウパーが次々と溢れてくる。鈴口から、トローツ、と垂れ落ちたカウパーを、淫魔は舌で受け止めた。

「あむっ……… やあんっ♪ カウパー垂れちゃったねえ♪ こんなに我慢汁お漏らししちゃう変態チンポ、初めて見たよ。……ねえ、もつと出せるでしょ？ もつとカウ

パー出して♪」

淫魔は両手の指先で玉袋を入念に揉みほぐしていく。するとビクビクと脈打つチンポから、カウパーが盛大にほとばしった。

「あむっ……じゆるるっ、じゅぽっ……じゅぽっ」

淫魔は、カウパーが溢れる度に口で舐めとっていたが、やがてチンポにしゃぶりつき、そのまま離さず亀頭に吸い付いてフェエラを始めた。

「んぐっ……じゆるっ……ちゅぽっ、ちゅっぽ……ちゅっ、じゅぶっ……」

淫魔は激しいフェエラを続けながら、玉袋へのマッサージも続ける。

「我慢汁すごいね。口の中が我慢汁でいっぱいになっても、まだドンドン出て来ちゃう…………ごくっ……ごくっ……お兄さんの我慢汁、とってもおいしいよ♪ いっぱい出していいからね。遠慮せず、どんどん気持ちよくなってね」

男の腰とペニスがヒクヒク動き始めた。射精が近づいている証拠だ。

## 【第8話】

「じゅるるっ……ぐぽっ……じゅるっ、じゅぽっ、じゅぶぶ……」

淫魔は玉袋を手で触りながら、激しいフェラチオを続ける。

極上の舌遣いもさることながら、指での睾丸マッサージもたまらない。睾丸を揉みほぐすように指先でくすぐり、血行をよくして熱を帯びさせ、性感が加速度的に高まっていく。

男は込み上げる射精感を抑えきれなくなってきた。

「気持ちいいです……もうイッちゃいそうです」

「じゅぽっ、じゅぽっ、じゅっぽ……ちゅるるっ、ちゅぽっ……」

淫魔は答える代わりに、激しくチンポにむしゃぶりついて射精を促す。

舌を跳ねさせるように動かし、一番敏感な裏筋をレロレロと舐めまわしてくる。肉棒がビグビグ震え、男は喘ぎ声を漏らした。

「はあ……はあ……ああああっ！ 出ますー！」

「いいよお……じゅぽっ、じゅぽっ……お口の中でザーメン射精して♪ 青臭くて、あつっいドロドロの精液、ドピュドピュ出して♪ 口の中、ザーメンでいっぱいにして♪」

ちゆうううう……と淫魔はチンポに吸い付き、亀頭を入念に刺激する。

男は腰を震わせながら射精した。

——ドピユツ、ドピユツ、ドピユルルツ！

「んぐつ……んぐつ……けほつ、けほつ……」

淫魔の口の中に大量のザーメンが放たれた。激しく脈動しすぎて、淫魔の口から肉棒が飛び出す。

——ドプツ、ドプツ、ドピユツ、ドピユルルツ、ピユプツ！

「ぎゃあ……いやあん♪」

口から飛び出してもなお肉棒は射精を続け、黄ばんだ精液が淫魔の顔に滴る。

「元氣すぎて口からはみ出ちやつたねえ……あつ、まだ出てる♪ 口で絞り取ってあげるね♪」

そう言うと、淫魔は再び亀頭をパクリと啜え込み、ゆっくりとフェラを始める。

射精中の敏感な肉棒に、急激に刺激が加わり、肉棒はさらに高ぶって精液を放ち続ける。

——ドピユツ、ピユルツ、ピユツ、ドプルルツ、ブピユツ！

「んぐつ……んつ……んうう……んぐつ、んぐつ……」

淫魔は色っぽい吐息を吐きながら、口の中の精液を飲み込む。

意識が飛びそうになるほどの長い射精だった。

淫魔が口から肉棒を離すと、にゅぽんつ、と音を立てて、萎えた肉棒が姿を現した。ヨダレとザーメンでべとべとになっている。

「さすがに萎えちゃったかあ……じゃあまた勃起させてあげる♪」

淫魔はおもむろに自分のおっぱいを掴むと、男の口に乳首を押し付け、母乳を飲ませ始めた。

「くくつ……くくつ……」

男は赤ん坊のように、素直に母乳を飲み込む。ほんのり甘い味わいのミルクが、乾いたのどを潤してくれる。男は我を忘れて夢中で母乳を飲んだ。

やがて全身が熱くなり、特に股間が熱を帯び、肉棒はギンギンに勃起した。

「おー、いい感じじゃん。でも、もっとおっぱい飲んで、もっとチンポ硬くしてほしいな♪」

淫魔は慣れた手つきでおっぱいを絞り、さらに母乳を放出した。男はおっぱいを咥え込み、ちゅうちゅう吸い付いて、一滴もこぼさずに飲んでいく。

休憩を挟みながら数分間に渡って母乳を飲み続けていると、信じられないほどに性感が高まってきた。

まるで温泉に浸かっているかのように体全体が熱い。情欲がとめどなく溢れてきて、

肉棒は鉄のような硬度になり、普段より一回り大きくなっている。

ビクビク震える肉棒から、カウパーが滝のように迸る。

「はーい、エロチンポの完成♪ またこんなにガッチガチにしちゃってえ♪」

淫魔はけらけら笑う。

「本当はもつとザーメン飲みたいところだけど……今日は一旦休憩にしよつか」

「えっ?」

「人間なんだからそろそろ休まないと、お兄さん本当に死んじゃうよ?」

「……そ、そんな……でも、このまま寸止めだんて……」

男は勃起した肉棒からカウパーを垂れ流す。

「んふふつ、情けない姿ね。死にたくなかったら今日は我慢なさい♪ 明日になつた

ら、もつと気持ちいいこといっぱいしてあげるから、それまでにキンタマの中にザーメン

溜めておいてね。じゃあね、お兄さん」

そう言い残すと、淫魔は本当に行ってしまった。

男は全身を拘束されたまま、薄暗い洞窟の小部屋に一人残された。

「はあ……はあ……もつと射精したい」

もし両手が自由だったら、男は自慰にふけていたことだろう。

男は逃げる算段を整えるどころか、勃起したペニスを激しく震わせ、明日の快楽を待

ちわびていた。

## 【第9話】

翌朝、男のもとに淫魔がやってきた。

「おはよう、お兄さん」

淫魔はなぜだかバスタオルを体に巻いている。Jカップの爆乳がタオルに包まれ、深い谷間がより強調される。タオルが小さいせいで、ピチピチのふとももを存分に拝むことができた。

「さっそくチンポ反応しちやつてるし……後でたっぷり抜いてあげるから今は我慢しなさい♪ エッチする前に、今から一緒にお風呂入ろっか」

そう言ううと淫魔は男の体を拘束していた縄を解き始めた。

「もうすっかり骨抜きにされちやつたみたいだし、どうせ逃げないでしょ？ お兄さんがどうしても逃げたいなら、別に逃げてもいいんだよ？ でも、これからいつぱいエッチなことして、気持ちよくくビュービュー射精したいなら、私の後についてきてね♪」

淫魔は豊満な胸をたぶんたぶん揺らしながら、洞窟内の通路を足早に歩いていく。

男はすぐにそのあとを追いかけた。

もう迷いはなかった。事実、これから待ち受ける快楽を想像し、男は肉棒を高ぶらせ

ている。もはや完全に淫魔の虜となっていた。

複雑な通路をしばらく歩くと、湯気がもうもうと立つ部屋に到着した。

広々とした洞窟内の広間に、温泉が湧いている。岩に囲まれた湯は、数十人が入浴できそうなほど広い。

「ほら、いっしょに入ろっ」

淫魔は男の手を引いて温泉へと導く。

「あつ、ちよつと待って。お兄さんもう勃起してるんじゃない……しかもカウパー垂れてるだけど」

淫魔はしゃがみこんで男のペニスを観察する。可憐な顔を近づけられ、その興奮で肉棒がビクビク動く。余計にカウパーが出る始末だった。

「もう……まだ何もしてないのにカウパー垂れ流しちゃって……こんなに汚れてたら温泉入れないでしょ？」

淫魔はぼやきながらも、どこか嬉しそうに舌なめずりを一つした。

「しょうがないなあ……私がいしゃぶって綺麗にしてあげる♪ ……ちゆるっ……ちゆるるっ……じゅぶっ……」

淫魔はチンポにむしゃぶりつき、カウパーを口で吸い取った。ついでに唇で竿をしごき、裏筋を舌でレロレロ刺激する。

「あつ、気持ちいいです……はあ……はあ」

突然のフェラに、男の肉棒は鎮まるところか、逆に硬さを増していく。淫魔は肉棒から口を離すと、上目遣いに微笑む。

「これで綺麗になったね」

と淫魔は笑顔を見せる。しかし再び肉棒の先端から汁が出てきてしまった。

「あつ……もうっ！　せつかくしゃぶつて綺麗にしてあげたのに、またカウパーお漏らししてるじゃない」

淫魔は肉棒を手で掴み、口を開けて啜え込んだ。それからおよそ10秒ほどフェラチオをして、カウパーを舐めとり、また肉棒から口を離す。

「ちゅぽんっ……これで今度こそ綺麗になったね。じゃつ、温泉入ろっ………つてまた出てきちゃった♪」

すると淫魔はまたフェラチオをしてカウパーを口で吸い取る。

「じゅるっ……じゅるるっ……じゅぶっ……ちゅぽっ……」

湯気が立ちのぼる温泉の前で、しゃぶつては離す、しゃぶつては離す、を何度もひたすら繰り返していく。

フェラの時間は短い、舌遣いは抜群で、当然かなり気持ちいい。しかし刺激の時間が短く、インターバルも長いため、なかなか射精までは至らない。

フェエラで射精感が高まってきても、淫魔はすぐに口を離してしまうので、男はイクことができなかった。

情欲の高まりとともに悶々とした気分を吐き出せず、もどかしさを味わう男をよそに、淫魔は二十分……三十分……と同じことを繰り返す。

「じゆるっ……ちゅっ……ちゆるるっ……じゅぼっ……ちゅぼっ……」

「ああっ……もうイキそうです！」

男が肉棒を震わせながら宣言すると、淫魔はすぐに口を離してしまう。

「あっ……そんな……」

男が切なげにつぶやくと、淫魔はニコニコ笑う。

「んふふっ……今イケると思ったでしょ？ ごめんねもうちよつと我慢しようね♪  
朝一番の射精だもん。あとちよつとだけ我慢して、気持ちよくスッキリ射精しようね」

淫魔はそう言うと、また肉棒にむしゃぶりついた。

そんなことを五分ほど繰り返していると、ついに男の射精感が限界まで高まってきた。

肉棒の反応で察したのか、淫魔は口を離さず激しく吸い付き、休むことなくフェエラを続ける。

「ぐぼっ……ぐぶぶぶっ……じゅぼんっ……じゅぶぶぶぶっ……じゅぼっ、じゅぼっ……」

これまで何度も、射精感がギリギリまで高まったところで寸止めされてきた。しかし今度は、快楽の波の高まりを邪魔されることなく、存分にイクことができる。

「いいよお……出ひてっ……朝一番の特濃ザーメン、口いっぱいに射精して♪ 口から溢れちゃうくらい、大量に精子出して♪」

淫魔はいやらしい声音で言うと、じゅぶじゅぶ音を立てて勢いよく肉棒をしゃぶり上げる。

男は射精感の高まりを全身で感じながら、腰を振るわせて思い切り射精した。

——ドビュツ、ドピュツ、ドビュルルルツ、プピュルルツ、ビュツ……ビュツ……ビュ  
プツ！

射精は二十秒ほど続き、男は溜まった欲望を全て淫魔の可愛らしい口の中にぶちまけた。

「くくっ……くくっ……ゴクツ……」

淫魔は喉を鳴らしながら懸命にザーメンを飲み込んでいく。その拍子に、豊満なおっぱいがぶるぶる揺れる。射精量がすさまじく、到底受け止められる量ではない。淫魔の口の端から漏れたザーメンが、ぶるんぶるん揺れるおっぱいに滴り落ちていった。

淫魔の体の動きに合わせてザーメンまみれのおっぱいが揺れ動く。精液がおっぱい

を伝ってやがて地面へと流れ落ちていった。

## 【第10話】

「いっぱい出たね♪ 全部飲みきれなくて、零しちやつた♪ ……こんなにいっぱい射精してくれたってことは、気持ちよかつたってことでしょ？ 朝立ちチンポしやぶられるの気持ちよかつた？」

「はい、最高です……」

「よかつたね♪ ここから逃げずに、私とエツチし続けることを選んだ変態さんだもんね」

淫魔のエマは、ちやぼんつ、と片足を温泉に入れた。

「ほら、何突つ立ってるの？ 早く温泉入ろうよ」

エマに誘われ、男は温泉に足を入れ、やがて肩まで浸かつた。

ちようどいい湯加減だ。お湯に浸かっていると、体がぽかぽか温まり、疲れが抜けていくような気がする。

「この温泉は血行を良くして疲れを取る効能もあるんだよ。あとお肌がスベスベになるし……性欲も高まつちやうの」

エマは男のほうをちらりと見る。そうした何気ない仕草でも可愛い。

そしてやはり、豊満なおっぱいに目がいつてしまう。湯を浴びて湿気を帯びた肌が、とてもセクシーだ。

男はチラチラとエマのおっぱいを見て、ひそかに肉棒を硬くしていた。

「……あれ？ 誰かいるの？」

背後から若い女性の声が聞こえた。

男が振り返ると、三人の美女の姿があった。おそらく淫魔だろう。三人ともスタイルがよく、エマに負けず劣らずの巨乳だ。なぜかきわどいマイクロビキニを着ている。

ムチムチの肉感的な体を、申し分程度に隠す小さな布。ある種むしろ全裸よりも興奮を誘う格好だ。

「あつ、その子つてもしかして、エマの新しい男なの？」

「へえ……なかなかいい男じゃん」

「私たちも混ぜてよ〜」

三人の淫魔は豊満なおっぱいをタップタップ揺らしながら歩いてくる。彼女たちはためらいなく温泉に入ってきた。

「ダメだよ。この子は私のモノなんだから」

と、エマは男の頭に手を置く。まるで物のような扱いだ。

「え〜いいじゃない！ お願いっ！ ちょっとだけだからさ〜」

マイクロビキニ姿の三人の淫魔は、男の意思など気にも留めず、エマに話しかける。  
「……………しようがないなあ……………」

エマは嘆息し、こう続ける

「この子のチンポ、すつごく元気だし……………少しならいいよ。その代わり、一人一発までだからね」

「やったあ♪ ちようどザーメン飲みたいって思ってたところだったの」

マイクロビキニ姿の淫魔たちは、無邪気にはしやぐ。その容姿はまるでグラビアアイドルのように美しく、官能的だ。そんな美しい彼女たちが、これから精を絞ろうというのだ。興奮しないわけがない。男は湯の中で肉棒をガチガチに勃起させていた。

だが少し不安がある野も事実だ。昨日のように、また何回も連続で射精できるかは自信がない。

「なーに不安そうな顔してるの？ お兄さん男なんでしょ？ こんな可愛い女の子たちに抜いてもらえらんだから、幸せ者じゃん。……………分かってるよ、ちゃんと三回続けてイケるか不安なんだよね。心配しなくても大丈夫だよ」

エマは温泉の中で立ち上がる。Jカップの美しいおっぱいが、ぶるんつ、と豪快に揺れる。

「はーい、おっぱい飲んで性欲高めようね〜♪」

エマはみずからのおっぱいを掴み、男の顔にモニユモニユ押し付ける。

「いーっぱい精子出せるように、たっくさん飲んでね」

言われるままに男はエマのおっぱいを啜え、乳首を舌で転がし、コリコリ感を堪能しつつ、母乳をちゅうちゅう吸い出す。

「あんっ♪ やあんっ……お兄さんのエッチ♪ おっぱい吸う時まで舌でレロレロしちゃってえ……」

おっぱいを飲んでいると、男の肉棒はさらに高まりギンギンに勃起した。激しく打ち震えながらカウパーを振りこぼす肉棒に、淫魔たちはいやらしい視線を送る。

「じゃあ、まずは私が一発抜いてあげる」

青髪の淫魔が男に近づく。マイクロピキニ姿の爆乳の美女が、おっぱいをゆっさゆっさ揺らしながら歩いてくる。その光景を見ているだけで男はさらに興奮を覚えた。

「男って大抵おっぱい大好きだから、おっぱい吸って勃起してる時のチンポって、感度が段違いに高まつてるらしいよ。授乳手コキってプレイもあるくらいだし」

と、エマは男の胸を優しくポンポン叩きながら、授乳を促す。

「初めまして、私はミラ。よろしくね、人間さん」

さらに青髪の淫魔が男に体をすり寄せる。ふにゅんっ、と柔らかな双丘の感触。水着越しに当たる乳首はピンピンに勃起している。それを入念に擦りつけられ、男は吐息を

漏らして反応してしまう。

「本当におっぱい大好きなんだね。じゃあこれから、このおっぱいを使っていっぱい気持ちよくしてあげるよ。もう二度と人間の里に帰る気が起きないように、腰が抜けるくらい気持ちよく射精させてあげるから、期待してよね」

ミラは体を密着させ、おっぱいの柔らかかな感触をたつぷりと味わわせる。エマによる授乳が続く中、ミラは男の乳首を指先で弄ったり、全身を撫でまわしたりしながら、男の気分を高めていく。

口や胸板におっぱいをムニムニ押し付けられ、男は至福の表情でペニスをビクビク動かしている。

「私のおっぱい柔らかいでしょ?」

ミラはおっぱいを揺さぶって擦りつけ、こう続ける。

「ねえ、想像してみて? エマちゃんのおっぱいをちゅーちゅー吸って、かちかちに勃起したオチンポを……この柔らかくいおっぱいでみっちり挟まれて……上下にシコシコ動かされたら……きつとすつごく気持ちいいよ? おっぱい大好きなあなたには、たまらないでしょうね」

おっぱいを体に密着させながらのミラの卑猥な言葉に、男は呼吸を乱し、さらに肉棒を高ぶらせる。

「あんっ♪ 想像して興奮しちゃった？ オチンポが元気に跳ねてるところ見るの、大好き♪ ほらほら、もつと想像してごらん♪ マイクロビキニに包まれたおっぱいで、授乳パイズリされたら……気持ちよすぎてすぐ射精しちゃうかもねえ。……あつ、またピクピクしてる♪」

男は先ほどからエマのおっぱいを吸い続けている。そのせいで信じられないほど性感が高まり、肉棒は天を衝く勢いでそそり立ち、立派に反り返っていた。

マイクロビキニの爆乳おっぱいにパイズリされ、果てるところを想像するだけで、男は軽くイッてしまいそうなほどに興奮していた。

もう男は頭で思考することを放棄し、完全にみずからのチンポの欲求に従って行動していた。いきり立ち、悶々とするチンポに快楽がもたらされるならば、どんな恥でも受け入れるつもりだった。

## 【第11話】

「ほらほら、もつとおっぱい吸って♪」

エマは豊満な乳房を掴み、母乳を絞り出す。男は口の中に溢れる母乳を夢中で飲み込み、懸命におっぱいに吸い付く。

「必死に吸っちゃって……まるで大きい赤ちゃんみたいだね♪ 体もチンポも立派なのに、本当情けないなあ……」

エマはさらに母乳を絞る。男はそれに負けじと飲み続ける。それを繰り返しているうちに、男の性感はだんだん高ぶっていき、今や全身が敏感になっていた。肉棒の誇張がすさまじいことは言うまでもない。

「やんっ♪ おちんちん、すごいことになってるねえ。今にも爆発しちやいそう」

ミラは跳ねまわる肉棒を愛おしそうに見つめながら、玉袋に手を伸ばして優しくマツサージする。

「乳首も刺激してあげる♪」

一方、エマは男の乳首を、指先で、すうーっ、と円を描くように愛撫する。男は全身の感度が高まっているため、まるで射精寸前であるかのように、心地よさそうに全身を

ビクビクさせる。

顔と口には、おっぱいの柔らかかな感触。そして性感帯である乳首を、エマが絶え間なく愛撫する。さらに、精液が詰まったパンパンの玉袋を、ミラがいやらしい手つきで揉みほぐしていく。

男は恍惚の表情を浮かべ、みずからの体を淫魔に委ねる。

（気持ちいい……頭がどうにかなってしまいそうだ……もうチンポが限界……早く射精したい）

男は肉棒を震わせる。その敏感な体で、淫魔の愛撫を存分に味わわされた。

こころよい感触であったが、決してイクことはできない。母乳を飲まされ、おっぱいや指先で全身を優しく触れられ、情欲は高まる一方だ。気が狂いそうなほどに、もどかしい時間だった。

しかしこれも最高の射精を味わうためだと思えば、いくらでも我慢できる。

（ああ……あのマイクロロビキニに包まれた爆乳おっぱいに、チンコ挟まれない……そのままゆつくりしごかれて、パイズリでイキたい……あの綺麗なおっぱいに、思いつきり精子ぶっかけたい）

むしろ男は想像を巡らせ、期待に胸を膨らませて、さらに興奮していた。それから数分経った頃、ミラは男の顔を覗き込んでこう言った。

「いい表情ね。すごくエッチな顔してる……早く射精したくてしようがないんでしょ？」

ミラは男のふとももに、柔らかなおっぱいを押し付ける。たったそれだけのことで、肉棒がビクンツと、大きく反り返った。

「すごーおい♪ ギンギンに反り返ったチンポが、我慢汁垂れ流しながらビクビクしてる……おっぱい欲しくてたまらないんだよねえ……タマも、チンポも、ぱんぱんに張って苦しそう……なんだか見ててかわいそうになつてきちゃった。……そろそろイカせてあげようかな」

ミラは誘惑するように谷間を寄せる。

男は温泉のそばの岩場で仰向けになり、エマのおっぱいを吸い続けている。当然、肉棒の硬度は尋常ではない。長い焦らしの最中に大量の我慢汁が溢れ、竿から玉袋を伝つて岩にぼたぼたと流れ落ちていた。

「ずいぶん大量にお漏らししちゃったね……ちゃんと我慢できたご褒美に……このおっぱいで、スツキリさせてあげるね♪」

ミラは男の足にまたがり、大きなおっぱいを肉棒の上にかぶせるようにして、ムニユツ、と置いた。

「あつ……」

突然の刺激に、男は思わず声を上げる。

ずっしりとした重量のある柔肉が、腰と肉棒に覆いかぶさる。至福の柔らかさだ。相  
当な重みがあるが、全く嫌な感じはない。むしろこのおっぱいの重量感が幸せだった。

興奮と期待で肉棒はビクビク震え、柔肉を押し上げる勢いで起きあがっている。

——もにゅんっ、もにゅんっ。

ミラはおっぱいを男のふとももに滑らせ、肉棒の先端を口で啜えた。

「じゅるるっ、じゅぽっ……じゅぶっ……じゅぶっ……」

ミラは舌で亀頭を舐めまわし、我慢汁を吸い上げていく。

「ぶはっ……」

ミラは肉棒から口を離すと、柔らかなおっぱいの谷間に肉棒を挿入した。そして口を  
開け、谷間へヨダレを落とす。我慢汁とヨダレが混ざり合い、谷間がヌルヌルに光沢を  
帯び、何ともいやらしい光景だ。

「ほーら、チンポ入っちゃったねえ。おっぱいに隠れてほとんど見えなくなっちゃった」  
手を使わない、ビキニの圧力だけによるパイズリ。それがこれほどまでに気持ちいい  
とは、男は予想していなかった。

——又チュツ……又チュツ……

肉の音が響く中、ミラはゆったりとした速度でパイズリを続ける。両手が空いている

ため、指先で男の全身をマッサージする余裕があった。

「ちよつとお……パイズリに夢中になってないで、ちゃんとおっぱい吸つてよ♪」

エマは退屈そうに、男の胸板をぼんぼん叩く。

「ちゅうううう……」

「あんっ♪」

男が急に強く吸い付いたため、エマは体をくねらせる。

それを見たミラはこう言った。

「仕方ないよ。ただでさえ母乳飲みすぎて、全身が敏感になつてるんだもの。この反応からして、指先でちよつと体に触られただけでフル勃起しちゃうくらいの感度じゃない？　こんな状態で私にパイズリされたら、夢中になつてもしょうがないよ」

事実、ミラの言葉すら、男の耳にはほとんど聞こえていなかった。

「はあ……はあ……ビキニパイズリ気持ちいいです……」

男は目を閉じて快楽に浸っている。強力な媚薬効果のある母乳を大量に摂取してのプレイ……人間とのエッチでは絶対に味わえないレベルの快感の強さだ。多少正気を失つてしまうのも仕方ないことだろう。

「どう、気持ちいい？　ちゃんと私の目を見て応えなさい♪」

ミラはおっぱいを激しく揺さぶりながら、反応をうかがう。そんなことをしたら、答

えるのもつらい状態になると知りながら、あえて激しくパイズりする。

「はあ……はあ……すごく気持ちいです」

何とかミラの言葉を聞き取った男は、夢見心地で返事を返す。

柔らかなおっぱいの極上の感触が、凝り固まった肉棒をほぐしていく。まるで体全体がとろけていくような快楽。男は荒い息を繰り返し、体の底からザーメンをせり上げていく快感に浸った。

## 【第12話】

「ほらほら〜♪ どう？ パイズリ気持ちいい？ もつと激しくしてあげる♪ なが〜く焦らして溜めたザーメン、一気に出して、スツキリ爽快な気分味わおうね♪ きつと最高の射精になるよ〜」

ミラは豊かなおっぱいで肉棒を挟み込み、ムニムニと乳圧をかけつつ、体全体を上下に動かし、懸命に男を喜ばせる。

男はすっかりそのパイズリの虜となり、はあはあ言いながら必死で快楽を貪っていた。

やはり淫魔のおっぱいの感触は段違いだ。何かに触れると、ふにゆりと形を変える柔らかさがあり、それでいて適度な弾力もある。まるで弾力のあるマシユマロのようで、おっぱいを胸板に押し付けられただけでも、相当気持ちいい。

そんな素晴らしいおっぱいで、敏感なチンポを挟まれ、シコシコしごかれているのだ。おっぱいが一往復するたびに、筋肉が極上の快楽を与えていく。

さらにビキニパイズリの視覚的な破壊力もすさまじい。小さな布に包まれたおっぱいが揺れるさまを見ているだけで、軽くイキそうになるほど興奮する。

「はあ……はあっ……もうダメです、イッちゃいそうです」

男は全身をだらしなく震わせ、そう伝える。

「いいよお♪ 出して♪ もつと気持ちよくなつてね♪ おっぱいの中でちんぽビュクビュクさせながら、濃いザーメンいっぱい出して♪ 最高の気分味わいながら、濃くて臭い精子、たつくさん射精して♪」

むぎゆうううう……とミラは乳圧を一気に強める。射精寸前の肉棒はさらに誇張し、谷間の中で振り子のように揺れ動く。

「あんっ、すっごい……おっぱいの中でちんぽがキュンキュンしてる♪ ちんぽが感じてるのが伝わってきて、私もうれしいよ。ほらほら、イッて♪ このままパイズリ挟射しちゃうお♪」

ミラは最後の仕上げとばかりに乳圧をかけてくる。

——ドプツ、ドビュツ……ピュルルツ……ピュルツ……ドプンツ……

震える肉棒から、幾本もの濃い精子が飛んだ。臭くて粘つく白い液体が飛び散り、ミラのおっぱいや谷間に張り付く。

ミラはおっぱいを動かすのを止めて、ちょうどいい具合に乳圧をかけながら精子を絞り出す。

ザーメンまみれのミラのおっぱいを見て、さらに射精の勢いが増す。

——ドビュツ、ビュツ、ビュルツ……ブピュツ……ビュルルツ……ビュツ……

さらに精子が大量に溢れ出て、谷間をどろどろにしていく。あまりにも射精量が多すぎて、的を外したザーメンがそこら中に飛び散ってしまった。

「いっばい出たねえ………イク時、ちんぽ気持ちよさそうにビュクビュクしてて、なんか私も幸せだったよ」

ミラの全身を彩るザーメンが、トロツと流れ落ちていく。美しい顔が、爆乳が、お尻が……肉感的なムチムチの体が白い汚液に汚されている。ミラは嫌がるどころか、むしろ恍惚として谷間のザーメンをすすっていた。

男はその姿を見ているだけで、たまらなくなつた。今しがた大量に射精したばかりであつたが、肉棒は天を向き、そそり立っている。

「はーい、じゃあ次は私の番ね」

別の淫魔が、男に抱き着く。主張の激しい大きなおっぱいが、男の胸板をくすぐる。

「さすが私が見込んだ男ね♪」

一方、エマは男の耳元でささやく。

「あんなにいっばい出したのに、もうギンギンじゃない♪ この様子じゃ三連射なんて全然余裕だね。よかったねお兄さん、いっばい射精出来て♪」

全裸のエマが背後から抱き着いてくる。生のおっぱいが背中に当たり、男は身悶えす

る。その反応に気をよくしたエマは、ふとももを脚に絡ませ、おっぱいを背中にスリスリしてきた。

ハリのある柔らかかなふとももの感触と、おっぱいの心地よさに、男は肉棒を高ぶらせる。

「私はソフィアです。性感帯はおもに下半身……特にお尻が敏感です」

ソフィアというその長身の淫魔は、豊満な肢体を男へ見せつける。

マイクロビキニに包まれた、ポリユーマーなおっぱい。布がおっぱいに食い込んでいて、今にもはちきれそうだ。

きわどいTバックのお尻は、ぶりんと突き出ている綺麗な形。長身で体のサイズがやや大きいこともあるが、他の淫魔と比べて、お尻が一回り大きい。

それを見て、男は期待に胸を高ぶらせた。

（なんだあのお尻……すごいな。バックからガンガン突きたい……一発目は中出しして、二発目は尻にぶっかけたい）

男のいやらしい目線に気づいたのか、ソフィアはゆっくりとお尻を振って誘惑してくる。

「その、ケダモノのようなエッチな眼差し、いいですね。そんな目でお尻を見られると、私も興奮してしまいます」

ソフィアはぷりんとしたお尻を突き出し、男のふとももに押し当てた。

「あぁっ……」

予想以上の感触に、男はつい声を上げてしまった。

「私のお尻の感触、いかがですか？」

「や、柔らかくて最高ですっ……」

もし、このお尻でペニスをしごかれたら、相当気持ちいいに違いない。男はその光景を想像し、さらにペニスを硬くしてしまう。

「ソフィアのお尻、気持ちいいでしょ？」

エマは背後から男に抱き着き、おっぱいを押し付けながら耳元でささやく。吐息が当たり、くすぐつたい。

「あそこまでいいお尻をした淫魔は、なかなかお目にかかれないからねえ……ソフィアの十八番の尻コキで、たっぷり射精させてもらいなさい♪」

エマは楽しげに言うのと、男の乳首を指先で弄り回し、耳を甘噛みする。

「気に入ってくれたようなので、私の自慢のお尻で、ザーメン搾り取ってあげます」

ソフィアは男に尻を向け、じっくり見せつけながら、後ろ手でチンポに触れ、その硬さを確かめるように指先で繊細な刺激を与えた。

## 【第13話】

「お尻でチンポを擦る前に……まずはヌルヌルにしていけますね」

ソフィアは男の前でひざまずくと、玉を鷲掴みにしつつ、根元にキスをした。

「ほらほら、いっぱい感じて♪ もっと反応してもいいんだよ♪」

一方、エマは後ろから男に抱き着き、ぎゅつと体を密着させ、おっぱいや太ももの柔らかな感触を存分に堪能させる。

「んっ……ちゅぷっ……」

肉棒がギンギンに高まったところで、ソフィアはしやぶりつく。

「じゅぽっ……じゅぶっ……じゅるるっ……んっ……」

唾液を多めに出しながらの濃厚なフェラチオ。ソフィアは肉棒をいやらしく舐め回し、ヌルヌルに湿らせていく。

「我慢汁すごいですね……口の中がオスの匂いでいっぱいになって、頭がクラクラしてきます……ちゅぷっ、じゅぽっ……じゅぽぽっ♪」

「ああっ……はあ……はあ……」

肉棒を貪るような激しいフェラに、男は体をよじつて感じる。

「んっ……じゅっぼ、じゅっぼ……ちゅぼっ……じゆるっ……じゅぼっ」

ソフィアはさらに強く吸い上げ、丹念に肉棒を舐め上げていく。

そして口をすぼめて顔を激しく上下させ、バキュームフェラを行う。おっぱいがぶるんぶるん揺れ、口から唾液が次々と滴り落ちていった。

「ぶぼっ……じゆるるるっ……じゅぼっ……ちゅっ……ちゅぼっ……」

「あっ……待ってください。気持ちよすぎて、フェラだけでイッちやいそうです」  
男は声を震わせてそう伝える。

だがソフィアは構わず肉棒をしゃぶり続ける。

「じゅぼっ……ぐぼっ……ぐぶぶっ……じゆるんっ……ちゅぼんっ……」

「あっ……本当にイッちやいますー！」

「じゅぶぶっ……じゅぼっ……じゅぶぶっ……じゅぶっ……」

「ああっ……イクッ！」

男がビクンと腰を震わせたところで、ソフィアは肉棒から口を離れた。

「はあ……はあ……はあ……」

男は射精寸前の肉棒をピクピク動かす。生臭い匂いを放つそれは、我慢汁とヨダレでヌルヌルにぬめっていた。

「惜しかったねえ……もうちよつとで射精できたのにねえ♪」

エマはニコニコ笑いながら、おっぱいをムニムニ押し付け、さらに背後から手を回して、男の乳首を指先で弄る。

ギリギリの寸止めを受けた直後だったため、男は肉棒と体を、情けないほどにビクビク震わせるのだった。

「これで下準備は完了です。このヌルヌルのエロチンポを、このお尻でシコシコすると、きつととても気持ちいいですよ」

ソフィアは男の表情を間近で覗き込みながら、そつと頬を撫でる。そしてもう一方の手で、玉袋を優しく撫でまわしていく。

「射精できなくて残念だったね♪」

と、エマが背後から抱きしめてくる。

「でも今度こそ、あのおつきいお尻で抜いてもらえるよ♪ チンポすつごい気持ちよくイカせてもらえるから、期待しなさい♪」

エマは熱い吐息を吹きかけながら、首筋や耳を舐めてくる。熱くヌルヌルした舌の感触に、男は身震いした。

「チンポも、キンタマも、ずいぶん張ってますね。まだまだザーメン溜めこんでる証拠ですね。……これは期待できそうです」

ソフィアは玉袋をマッサージしつつ、男の乳首を舐め始めた。いきり立つ肉棒には触

れず、緩い愛撫で少し時間を置いて男の射精感を沈めていく。

それから五分ほど経つと、ソフィアはマッサージをやめて、くるりと振り返ってお尻を向けた。

肉厚なお尻が、ぶるんつ、と弾む。

その圧倒的な肉感に、男は生唾をのむ。平均的な人間の女性のお尻の、倍近くはあるのではないだろうか。豊かな丸みを帯びたお尻は、パンパンに張りつめ、丸々とした曲線を描いている。もし背後から突き入れたら、ピストンするたびにお尻がたわみ、腰に当たってさぞかし気持ちいはずだ。

(なんてエロい尻だ……後ろから挿入して、バックでガンガン突きたい……)

男はソフィアのお尻を食い入るように見つめ、肉棒を高ぶらせる。その様子を見たソフィアは、後ろ手で肉棒に触りながら、こうつぶやく。

「本当に元気なチンポですね。大きくて形もいいですし、ピンピンで硬さもあって、我慢汁の量も多いですし……これはなかなかいいモノですよ」

ソフィアは肉棒から手を離すと、手についた我慢汁や唾液を、みずからのお尻の割れ目に塗りたくった。豊満なお尻がテカテカと光沢を帯び、とてもいやらしい。

むしろあのお尻の感触を堪能するには、セックスよりも尻コキのほうが向いているのかもしれない。

「はい……これでも尻コキできますよ」

ソフィアはお尻を左右に揺さぶり、男を誘惑する。

「ほらほら、もつとチンポ硬くできるでしょ♪」

エマは背後からおっぱいを擦りつけながら、執拗に乳首を刺激してくる。もうその愛撫だけで我慢汁が次々と溢れてしまうほど気持ちいい。

その上、前からソフィアがお尻を押し付けてきた。

「うあああ………はあ………はあ………最高です」

「私のお尻、気持ちいでしょ？」

まるでおっぱいに肉棒を埋めているかのような感触。ふくよかなお尻に亀頭が食い込み、埋もれていく。

肉棒がTバックのデカ尻に触れた………たったそれだけのことで、男の剛直は信じられないほどに硬くなっていた。

「私のお尻の感触、もつと味わってください。我慢汁を出せば出すほど、ヌルヌルになってさらに快感が高まります」

ソフィアは、ぶるんっ、ぶるんっ、と勢いよく尻を左右に振り、肉棒を叩きつける。むっちりとした尻肉によるピンタを受け、肉棒から我慢汁が噴き出した。

ソフィアはお尻を肉棒に擦りつけ、叩きつけ、いやらしい腰遣いで男に快楽を与えて

いった。

「相変わらず、我慢汁の量が尋常ではないですね……もうお尻がヌルヌルになってしまいました」

ソフィアのお尻は、まるでローションをぶっつけたかのように光沢を帯びている。

「はあ……はあ……」

ただでさえ煽情的なお尻がさらに淫靡さを増している。男はもう、そのお尻を見てい  
るだけで息を荒げてしまうほどに興奮していた。

「いいですね、そのエッチな目つき。ケダモノみたいで可愛いですよ。……我慢汁が出  
やすいのは、好都合です。先ほども言った通り、ヌルヌル滑ったほうが快樂が高まりま  
す」

そう言うと、ソフィアは肉棒にお尻をあてがい、腰を振って尻コキを始めた。

ハリのある柔らかなお尻が、むにむにと肉棒を包み込み、しごき上げる。

温泉に男の喘ぎ声が響き渡った。

## 【第14話】

「どうですか？ 私のお尻、気持ちいいですか？」

ソフィアは、ギンギンになった肉棒にお尻を擦りつける。

我慢汁とヨダレでべとべとになった肉棒はヌルヌル滑る。尻肉の感触が心地よかつた。

「ソフィアのお尻気持ちいいでしょ？ 焦らしたからすぐイッちやうかもねえ」

エマが背後から抱き着き、おっぱいを押し付けながら体中を撫で回してくる。

ビクン、と肉棒が反り返り、ソフィアのお尻に、ペチン、と当たった。

「とても元気なペニスですね」

ソフィアはさらに腰をくねらせ、左右に揺さぶって刺激を与えていく。

「はあ……はあ……ソフィアさんのお尻、スゴいです」

男は荒い息を吐きながら快楽を貪る。

大きくて肉付きのいいお尻を、ただ見ているだけでもたまらない。

そんなお尻に肉棒が触れ、尻肉にみっちり挟まれてしごかれているのだ。興奮しないはずがない。

汗と我慢汁と唾液が混ざり合い、肉棒がよく滑る。尻肉の圧迫が心地よく、まるで膣内に挿入しているかのような幸福感を覚えた。

「尻コキなのに、挿入してるみたいで……気持ちいいです」

「それはよかったね♪」

エマは背後から首筋を舐めてくる。背中に押し当てられるおっぱいから温かい母乳が溢れ、じんわりと背中に広がる。その感触に男はさらに股間を硬くしてしまう。

「あなたのペニス、ガチガチに硬くなってますよ。興奮して感じているのですね」

「ソフィアさんのお尻、気持ちよすぎて……あぁっ……イキそうです」

男がブルブルと腰を震わせると、ソフィアはお尻を肉棒から離してしまった。

「あっ……そんな……」

「すみませんが、もう一度だけ時間を置きますね。そのほうがペニスがより高ぶって、射精量も増加し、イク時の快感も増大します」

射精間際の肉棒がビクビクと震えるさまを、ソフィアは嬉しそうに見つめる。

「あははっ、また焦らされちゃったね♪ ほらほら、うしろからおっぱいでムニムニしてあげるから元気出して♪」

エマが柔らかなおっぱいを背後からモニューンモニューンと入念に押し付けてくる。

「射精感が鎮まるまで少し待ちましょうか」

そう言うと、ソフィアは男の玉袋をマツサージし始めた。決して絶頂には至らない臍気な愛撫。当然ながら肉棒は脈打つが、二人の淫魔は決してそこには触れず、男の股間に熱い視線を送りつつ、濃厚な愛撫を続けるのだった。

「そろそろ再開しましょうか」

ソフィアは体の向きを変え、豊かなお尻を見せつける。

「はあ……はあ……」

男はソフィアのお尻を見ただけで肉棒を激しくビクビク震えさせる。

「お待たせしました。今度こそ本当にイカせてあげます。私のお尻の感触……このギンギンのペニスでたつぷりと味わってください」

ソフィアはお尻を突き出し、肉棒にあてがうと、尻コキを始めた。

——ニルツ……ニルツ……ズチュツ……ヌチュツ……

様々な分泌物でヌメヌメになった肉棒は、擦れるたびに淫靡な音を響かせる。何度味わっても、本当に挿入しているかのような感覚がする。

ふわふわのお尻が肉棒を包み、撫でさする。ソフィアがお尻を動かすたびに、ムチムチのお尻がぶるんぶるんと、いやらしく弾んだ。

男はすぐに射精感が高まってきた。

「ああああ……出そうです」

「構いませんよ、好きな時に出してください。何度も焦らして、キンタマの中で熟成させた精液……思いつきりぶっかけてください」

——ズチュツ……ニユルツ……ニユプツ……ニユプツ……

セックスをしている時のような肉の音を響かせ、ソフィアは最後のスパートとばかりにお尻を苛烈に動かしてくる。

「うっ……はあはあ……出るっ！」

——ドピユルツ……ドプツドプツ……ビユルルツ……ビユプツ……ドクツ……ドクツ……

尻肉に挟まれた肉棒が打ち震え、精を存分にぶちまけていった。

ソフィアのお尻に精液が飛び散り、べとべとになってもなお、射精は続く。

——ビユルルツ、ビユツ……ビユルツ……ドピユルルツ……

ソフィアはお尻を左右に擦りつけたり、ふとももに肉棒を押し当てたりしながら、豪快に精液を受け止める。

「………はあ………はあ………結構な量が出ましたね。これだけ出してもらえれば満足です」

ソフィアは軽く息を吐き、こう続ける。

「また硬くなっています……素敵なペニスですね。もう一発いいですか？」

ザーメンまみれの巨尻を向けながら誘惑され、男は股間をいきり立たせる。しかし、「ダメだよ。一人一発までつていう約束でしょ?」

エマの言葉に、ソフィアは残念そうに引き下がる。

「そうでしたね。エマがそう言うなら諦めます。……また機会があればエッチしましょう。この自慢のお尻でもつといるんなことしまししょうね」

ソフィアは男の前にひざまずき、肉棒を啜えた。

——ジュルルツ……ジユポツ……ジユブブ……チュプツ……

精子や我慢汁を残さず吸い取る、濃密なお掃除フェラチオ。

——ちゅぽんっ

ソフィアが口を離すと、フル勃起した肉棒が飛び出した。ソフィアは名残惜しそうに立ち上がり、数歩下がった。

「はくい、今度は私が抜いてあげるね」

黒髪の清楚な淫魔が男に近づき、いきなり玉袋を鷲掴みにした。

「あっ……」

掴むと言っても、手つきは柔らかかだ。鷲掴みにしているはずなのに、触れるか触れないかという極上の指遣い。

「私はスーシエ。マッサージュが得意なんだよね」

スーシエと名乗る黒髪の巨乳美女は、おっぱいをぷるんと弾ませながら、玉袋を愛撫する。

(この人うますぎる……もうキンタマが熱くなってきた……)

繊細な反応を示す男を見て、スーシエはニコニコ笑う。

「私の指技でたっぷり射精させてあげる。まずはキンタマを入念にほぐしてから……ね」

確かに、もしもこの絶妙な指遣いでチンポに触れられたら、きつとたまらないだろう。男は期待感を胸に、肉棒をひくつかせるのだった。

## 【第15話】

「チンポを気持ちよくする前に、先に全身をマッサージしてあげるね♪」

スーシエの指が男の体を這い回る。

「あつ……あああつ……はあはあ……」

男は体をくねらせて反応する。

（くすぐったくて心地いい……）

体全体を溶かされるような感覚だ。スーシエの指が触れた箇所が熱くなり、敏感さを増していく気がした。

最初は男の腹部を優しく揉んでいたスーシエであったが、徐々に指を上へと滑らせ、胸板に到達した。そして細く繊細な指が男の乳首に触れた。

「うあつ……気持ちいいです」

絶妙な指遣いで乳首をくすぐられ、男は肉棒をピンピンに反り返らせる。スーシエはその様子を見ながらこう言った。

「乳首敏感なんだね♪ オチンチンすごい反応してるし、息荒くなってるよ？ 男の子にしては乳首敏感すぎじゃない？」

「だ、だってスーシエさんの指遣いが……ああっ♪」

「そんなにイイの？　じゃあもつとしてあげる。……ほら見て。君の乳首、ちよつと勃起してるよ？　男の子なのに乳首立たせちゃうなんて……本当エッチなんだから♪」

男は乳首と肉棒を硬く勃起させ、悶々とした情欲を高ぶらせていく。すでに我慢汁がほとぼしり、肉棒は臨戦態勢だ。

「気持ちよさそうだね〜お兄さん」

エマが背後から抱き着いてきた。

「スーシエが最後の一人なんだから、頑張つて精子作つて、いっぱい射精しなさいよ」

エマは、むぎゆううう……とおっぱいを背中に擦りつけてくる。柔らかな乳肉の感触と、コリコリした乳首が背中で擦れ、男はいつそう高ぶる。

——ムニユツ……ムニツ……ムニユン……

「うっ……はあはあ」

「おっぱいも好きなんだね〜」

スーシエは、男の肉棒が反応するのを見逃さなかった。

「それなら、前からもしてあげるね♪」

むにゆううう……と、スーシエはその素晴らしいおっぱいを、男の胸板に押し付ける。

「あっ……そんな……両側からだなんて……」

うしろと前、両側から体をおっぱいに挟まれ、男は至福の表情を見せる。

「あつたかくて、柔らかかくて……幸せです」

柔らかな乳肉が男の体を包み込む。肉棒の先から我慢汁をとろとろ溢れさせながら、男は目を閉じておっぱいの感触に溺れる。まるで全身をパイズリされているかのような、幸せな気分だった。

「あつ……オチンチンとキンタマがキュンキュンしてる♪ いっぱい出せそうだね♪」  
スーシエはパンパンに張った玉を優しく驚掴みにした。

「ひゃああつ……」

「あははっ、何その声……女の子みたいな声出しちゃつてえ♪」

と、エマが背後から抱き締めてきた。

「んっ……」

エマは頬にキスをしてくる。

「じゃあ私も……んっ♪」

するとスーシエも反対側の頬にキスをした。

「んっ……んっ、んうっ♪」

おっぱいを密着させたまま、二人の淫魔はソフトなキスを繰り返す。ぶるぶるの柔らかな唇が何度も頬に触れ、何とも言えない多幸福感が男の体を支配する。

(なんだか、体が感じやすくなってる気がする)

男は、淫魔と肌を重ねるごとに自分の体がどんどん敏感になっていくような気がしていた。現にいま、前後から濃厚な奉仕を受けていると、全身が男性器になったかのような快楽を覚える。

(エマの母乳を飲みすぎたせいか……?)

おっぱいと唇による愛撫を受けながら、何とか頭を巡らせる。だが次第にどうでもよくなってきた。

(そんなこと、もうどうでもいいか。……いま気持ちよければ、もうそれで……)

無抵抗のまま、身も心も墮落し、男は二人の淫魔に体を委ねる。

そうすることで余計な雑念が消え去り、さらに快感が高まっていく。

「はあ……はあ……はあ……気持ちいいです」

男がつぶやく。二人の淫魔が男の耳を咥え、舌でペロペロ舐めてくる。熱くてヌメヌメした舌が耳を這い回り、くすぐりたい。

男が必死で感じている様子を見て、エマはくすくす笑う。

「あむっ……ペロペロ……だんだん敏感になってきたねえ……もう全身が性感帯なんじゃないの？ 恥ずかしがらなくていいからね。気持ちいいなら素直に感じていいんだよ♪ 素直に私たちとのエッチを楽しんでね♪」

「はい…………♪」

乳や口を使った入念な愛撫。そして玉袋への丹念なマツサージ。男の肉棒はどんどん高まる一方だ。ビクビク震え、我慢汁がポタポタ落ちていく。

——むにゆっ…………むにむに…………むにゆっ、むにゆっ…………

——レロツ…………チュプツ…………チュポツ…………レロレロ…………チュポツ…………

二人の淫靡に前後からおっぱいを押し付けられ、舌による攻めを受け、男は体を震わせる。

すると、不意にスーシエが指先で肉棒に軽く触れた。

「うあああああつ…………」

「あははっ、大げさだなあ…………可愛い♪」

軽くソフトタツチされただけで、肉棒はビクンビクンと跳ねまわり、我慢汁を振りこぼす有様だった。

「んもう…………やだあ…………何このいやらしいオチンチン。いくらなんでも感度高すぎじゃない？」

スーシエは笑いながら、肉棒を触ってくる。

腫物に触るかのような、慈愛に満ち溢れた極上の指遣いで、ソフィアは肉棒に刺激を与えていく。

彼女は決して力任せにイチモツをしごくような真似はしない。両手の指先の腹の部分だけを使い、手を丸めて指先だけで竿を撫で回してくる。

——すりすり……さわさわ……すりすり……さわさわ

肉棒が火照って熱くなってきた。指が触れた場所が熱を帯び、気が狂いそうなほどの快楽の波が押し寄せてくる。

「龟头がパンパンになってるね。そろそろイッちやいそうかな？」

「はい………あつ、出そうです……」

男がそう伝えると、スーシエは前かがみになって男の乳首にしゃぶりついた。

「れろれろっ……ちゅぱっ……イッてもいいよ♪ 乳首吸ってあげるから、たっぷり射精して♪」

「はあはあ………ああ、もう限界です。スーシエさんのマッサージ、もつと味わってたいの………ああつ………で、出るっ！」

——ドビュルルツ……ビュプツ……ビュクツ……ビュクツ……ドプンツ！

スーシエの指遣いに耐えられず、男は盛大にザーメンをまき散らすのだった。

## 【第16話】

「あつ、濃い精液がこんなにたくさん……ありがとうございます」

「ザーメンおいしかったよ♪」

「またエッチなことしようね♪」

三人の淫魔は少し名残惜しそうにしながらも、温泉をあとにした。

彼女たちが歩くと、マイクロピキニに包まれた爆乳が、ぶるんぶるん揺れる。Tバツクの豊満なお尻もプルプル揺れ、後ろ姿もたまらない。

男が肉棒を高ぶらせていると、エマが手を引つ張った。

「お疲れ様。ちゃんと三連射できたね。さあ、温泉入ろっ」

エマに促され、ちゃんとおぼん、と温泉に入る。

「いっぱい射精したからね。しっかり温もって、また精力回復しようね」

そういえば、この温泉には性欲を高める効果があるという。確かに、この温かいお湯に浸かっていると、全身の肌が熱くなって敏感になっていくような気がする。

「……っ！」

十分ほど浸かっていると、股間がムズムズしてきた。

「どうしたの？ もう我慢できなくなってきちゃった？」

男の様子を見て、エマは湯の中に手を突っ込み、肉棒をそつと撫でる。

「うあああ……」

「もうビンビンじゃない♪ どれだけ元気なの？ ほんと信じられない♪」

「あつ、待つてください。今触られたら、我慢汁出ちやいます……」

「いいじゃない、出しちゃえば？ ていうか、さつきからずつと目の前で熱い絡みを見せられてたから、私ももう我慢できないんだよね」

エマは男を温泉から引つ張り出して、力づくで押し倒す。

「ちよつ……エマさん？」

「ふふふつ……力抜いてなさい。あとで私のオマンコ味わわせてあげる」

「……!!」

「入れる前に、まずはもうちよつとチンポ硬くしようね♪」

エマは、仰向けの男の上に覆いかぶさると、玉袋を弄りながら肉棒を口で啜える。

「シユルルツ……グポツ……ジユポツジユポツ……ジユブツ……」

それほど激しさはない。射精させるためではなく、肉棒を硬くするためだけの愛撫だ。弱めの吸い付きではあるが、それがかえって心地よい。

エマの狙い通り、彼女の口の中で肉棒はどんどん硬くなっていった。

「じゅるるっ……じゅぼっ……ちゅっ……ぺろっ……ぺろぺろ」

「あああああ……イイ……」

「んふふっ……こんな軽めのフェラで、余裕なく感じちゃってえ……」

エマは優しい舌遣いで竿を舐め回してくる。

「れろっ……ぺろぺろ……ぺろっ……ちゅっ♪」

「はあ……はあ……」

「れろれろっ……ちゅぶっ……ちゅるっ……ぺろっ……ぺろぺろ……」

エマは決して射精しないよう加減して、弱めのフェラチオを続ける。

「こーやって焦らされながら、優しくチンポ刺激されるの好きなの？」

「はい……♪」

「あははっ、やっぱりね♪ チンポすごく硬くなってるもんね♪」

エマは胸を寄せ、ムニユンと谷間に肉棒を挟み込む。

「おっぱいで、もーっと硬くしてあげる♪」

軽い乳圧をかけつつ、エマはおっぱいを上下に揺すってパイズリを始める。

決して射精はできないが、おっぱいの柔らかさを、敏感な肉棒で存分に味わうことができる。

谷間から龟头が出たり入ったりする姿がとてもいやらしい。おっぱいの谷間に肉棒

が埋もれている光景を見ているだけで男はさらに興奮し、股間を高ぶらせる。

——ムニユツ、ムニユツ……ムニツ、ムニツ……ムニユウ……ムニユツ……

「先つちよ啜えてあげる♪」

エマはパイズリしたまま、亀頭を啜えた。

「ちゆるっ……じゆるるっ……ちゅぽっ……ちゅぶん」

そのまま吸い上げ、舌を使って丹念に裏筋を刺激してくる。

優しめのパイズリフェラのはずなのに、それでも男は気が付くとザーメンが込み上げてくるのを感じた。男は体と肉棒を震わせつつ、なんとかこらえようとする。

「あっ……待って……もうイキそうです」

「ちよつとお……せつかく焦らしてチンポ硬くしてるんだから、まだ出しちゃダメでしょっ…」

エマは、暴発しないように一旦奉仕を中断する。

「出すならこつちに出しなさい♪」

エマは騎乗位の体勢で、一気に奥まで肉棒を挿入した。

——ズプリ……

熱くて柔らかなトロトロの膣が肉棒を包み込む。それはとてもこの世のものとは思えないほどの、極上の快感だった。

「ああああ……何これ、気持ちいいです……」

「あははっ、やっぱり童貞だったんだ♪ まあ、初物は好きだからいいけど。淫魔のおまんこは人間のとは比べ物にならないくらい気持ちいいから、すぐイツちやうかもね。……じゃあ今から思いつきり中出して、童貞捨てちやおつか♪」

エマは激しく腰を上下させ、無駄のない動きでセックスを始める。ぶるんぶるんつ、と爆乳が弾み、互いの肉がぶつかる男が響き渡る。

——ズチュツ……ズチュツ……ヌチュツ……ヌチュツ……

「待ってください……さすがに中はマズい気が……」

「中を出していいよ♪ 妊娠させるつもりで、思い切りビュルビュル射精して♪ 私の子宮にザーメンぶっかけて♪」

「あっ、激しっ……もう我慢できません……イキそうです」

「いいよ♪ いっぱい出して♪ 我慢しないでいいから、いつでもイッていいよっ♪」

——ドピュツ、ドピュルルツ……ドプツ……ドクツ……ドクツ……

そして温かい膣の中で射精を迎えた。

「うっ……はあ……はあ……」

男は熱い息を吐きながら、大量の精液を膣内に注いでいく。

——ドピュルルルツ……ピュルルツ……ドピュツ……ピュプツ……

「あんっ……っすっごおい♪ あっついザーメンが子宮に何回もかかっている♪ もっと……  
もっと来て♪ トロトロのザーメンで、おまんこ満たして♪」

気持ちよさそうに膣内射精を受け入れるエマの姿を見ながら、男は残りの精液を吐き出し、極上の気分で初めての生中出しを味わった。